深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **かぐや姫がほかの人と違うことが分かる部分を、本文中から指摘してみよう。**

【答】①（光る竹の筒の中に）三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。（四六・5）　②この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔ててよごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。（同・11）　③三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば（四七・2）　④この児のかたち、けうらなること世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。（同・5）　⑤翁、心地悪しく苦しきときも、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。（同・6）

2 **かぐや姫に対する翁の心情はどのようなものか、本文中の表現をもとに考えてみよう。**

【答】「帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。」（四七・4）とあるところより翁が身内の者以外の目に触れないよう高貴な家の姫君のように育てていることが分かる。そこに翁がかぐや姫を大切に思い、できる限りのことをしようとする心情が表れている。

▼ポイント▲　幼い頃からのかぐや姫の神聖さを目の当たりにし、年を重ねてそれがますます増していくにつれ、翁もいよいよかぐや姫を大切に扱うようになっている。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助詞の種類と用法を、それぞれ確認してみよう。**

(1) **それを見れば**、**三寸ばかりなる人**（四六・4～5）

(2) **いかでこのかぐや姫を得てしがな**（四七・15）

【答】(1) 接続助詞　順接の確定条件の偶然条件を表す。

(2) 終助詞　自己の願望

▼ポイント▲　(1)活用語の已然形に接続し、順接の確定条件を表す。順接の確定条件には次の３つの意、①原因・理由、②偶然条件、③恒常条件がある。(2)活用語の連用形に接続し、自己の願望を表す。「てしが」「てしがな」「にしが」「にしがな」の類語がある。

言語活動の解答例

1 **本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に現れるか、確認してみよう。**

【答】

過去の助動詞「けり」

・ありけり。（四六・2）　・使ひけり。（同・3）　・いひける。（同・3）　・ありける。（同・4）　・慰みけり（四七・8）　・なりにけり（同・10）　・しける（四七・13）

存続の助動詞「たり」

・光りたり（四六・4）　・ゐたり（四六・5）　・光満ちたり（四七・6）

完了の助動詞「ぬ」

・知りぬ（四六・6）　・来ぬ（同・7）　・重なりぬ（同・10）　・なりぬれば（四七・3）　・やみぬ（同・7）　・なりぬ（同・9）　・なりにけり（同・10）　・なりぬれば（同・10）

完了の助動詞「つ」

・付けつ（四七・12）

▼ポイント▲　昔話を話すという語りの様相が強い時（書き出しの部分）は伝聞過去の「けり」が多用され、聞き手が話に引き込まれていくようなタイミングで存続の「たり」や完了の「ぬ」が多用されている。「養はす」（四六・7）「養ふ」（四六・8）「なりゆく」（四六・10）等現在形も多く使われている。

「ぬ」は自然的「つ」は人為的なものに使われる傾向にあり、「なよ竹のかぐや姫と付けつ」で「つ」が使われているのは、まさに典型的な例である。

（植田　敦子）